生きていた光秀

◇

山岡荘八／講談社

生きていた光秀　定価三六〇円
昭和三十八年六月三十日　第一刷発行
著　者　山岡荘八
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　和田製本
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町三の一九
電話東京（九四一）三一一一（大代表）
振替東京　三九三〇
落丁本・乱丁本はお取りかえ致します
© 山岡荘八　一九六三

目次

甲斐で見る富士　7
生きていた光秀　69
地震於久仁　93
竜紋兼光　125
太閤蛙　151
異説三成記　169
おせんと沢庵　191
八弥の忠義　225

装幀

吉田幸子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生きていた光秀

甲斐で見る富士

その一

甲州都留郡の谷村の城で、天正十一年、四十四歳の正月を迎えた鳥居彦右衛門元忠はあまり機嫌がよくなかった。

この前年は少しく事が多すぎた。元忠の主人の徳川家康と、織田信長と、その子の城之介信忠とが、ようやく武田勝頼を天目山に自滅させ得たのが三月十一日。これで暫く安静が続くと思ったのだろう、信長は、同月二十一日に安土へ帰還すると、間もなく家康に、京大坂から堺見物をさせてやるからと招待の使者をよこした。

彦右衛門元忠ももちろんその供をして安土へ行ったのだが、これが安土城で歓待されて、京から堺へまわったところで、何のことはない、招待した信長父子が、本能寺と二条城で、あっさり光秀に殺されてしまっていた。

六月二日未明のことで、その時元忠は家康のそばに居なかった。京でおこりを患って五条の旅館でウンウン唸っていた。それからいまだにまだ熱が下りきらぬような気がするほどあわただしい明け暮れだった。

とにかく京の市中はひっくり返るような騒ぎで、何時明智の手の者が旅宿改めにやって来るかわからないという。そうなれば、主人家康の従姉を女房にしているほどの男が、熱に寝乱れて、あら

ぬうわ言などを口走りながら討たれたとあってよいものではない。そこで、跳ね起きて刀を抜いた。

「――殿はもう生きてはいまい。わしもここで切腹するぞ」

そんなことを云ったような気がする。すると、夢の中で顔見知りになっている地獄の邏卒が、角をふり立てて元忠の手首をおさえた。その邏卒ははじめ青鬼のようだったが、次には毘沙門天の顔に変り、更に家来の高須弥助の仏顔になった。そして次に気の付いた時には、彼は、愛宕山の祈願所、長床坊の一室に、囲い雪で額を冷されながら寝かしつけられていた。

高須弥助が、長床坊の坊主どもを四方に走らせて問い探らせたところによると、どうやら家康は、茶屋四郎次郎の案内で、騒ぎを避け、伊賀の間道越えに、無事三河へ引きあげたらしいという。

その時元忠の味わった感慨は複雑だった。家康が死んでいて呉れればよい……そんな気持が心の奥のどこかに秘んでいたのだろうか。(――ヤレヤレ、まだ、人殺しを続けなければならないのかい)

それは切腹などより幾層倍も辛い「業――」の重荷を背負い直せられた感じで、われ知らず吐息がもれた。或いは家康の従姉にあたる女房に、この春早く死なれていた故かも知れない。もう自分も生き飽きた……そんな佗びしさが胸をはなれず、弥助ほどには喜べなかった。

「――さ、急いで帰らねばなりませぬ。いや、忙しく相成りまするぞ」

昂奮した高須弥助におも湯を突きつけられ、それからは、全く眼のまわるようなはげしい風の中の六ヵ月だった。

折角主殺しまでやってのけながら明智光秀は同月十三日に山崎の合戦で敗北。その知らせを嚙みしめる暇もなく、家康と共にあわてて甲斐へ攻め込んだ。信長父子は武田勝頼を討取ると、駿河一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国は家康に与え、上州厩橋（前橋）には滝川左近将監一益、信州小諸には森武蔵守長可、甲州の府中には河尻肥後守鎮吉とそれぞれ所管と所領をきめて引きあげてあったのが、本能寺の急変により、わずか二ヵ月あまりで音を立てて崩れだしたのだ。

上州の滝川一益と、信州の森長可はそれでもあやうく生命を保って引揚げ得たが、甲斐の府中にあった河尻鎮吉の方は、信長父子があまりに手きびしく甲州侍を殺戮してあった反感から、一揆の者に城内へ乱入されて殺された。

つまり、本能寺の変によって、俄かに主のない空国が三つ出来てしまったわけだ。

そうなると、甲斐一国でも、徳川家で頂戴しておかねばならぬ。いや、頂戴したあとがまたうるさかった。小田原の北条氏直が、そうはさせじと大軍を入れて来る。そうなると、甲州のことに明るい彦右衛門元忠は、大久保忠世や平岩親吉以上に立働かねばならなかった。今でも北条勢八千を僅か六百の手勢であしらい勝った三坂の激戦の駈引きなどは、傷あとにキリキリとひびいて来るほど生々しい。全くよく殺し、よく暴れ、よくもまあ生き残ったものだと思う。

そして、その戦勝がきっかけとなって北条氏直との和議がととのった。そのおりにも元忠は、一方の立役者で、家康の姫の一人を氏直に嫁がせることにして、甲・信二国は家康のもの、上州一国は氏直に進上と決め、先方から取ってあった人質の大道寺駿河守と山角上野介を、榊原康政、水野勝成の両人とともに三坂の城まで引具して、北条家へ引渡してやった時は、もう甲斐の天地へ霜が立ち、雪をかむった富士山が呼べば応える近さに見える十一月のはじめであった。

したがって、その頃からこの正月は甲斐の古府中にある、信玄の夢を結んだつつじが崎の館で迎え得るものと思っていた。

ところが家康は、散々に元忠の武勇を褒めちぎった後に、

「――そちには谷村の城を遣ろう。谷村に入れ」
そう云って、肝腎のつつじが崎の館には平岩親吉を入れていった。
「――信州は大久保七郎右衛門（忠世）、甲斐はそちと平岩、これで、わしも安心して浜松で正月が出来るというものだ」
正直なところ、谷村は決してわるいところではなかった。古府中から十一里あまり、桂川の東岸にあって、以前には武田家の将小山田信茂の持城で、付近に上田も多く、又信玄が心にかけた甲斐絹の有望な織場でもあった。しかし何と云っても古府中とは格が違う。それに家康が、わざわざ元忠の戦功をこじつけて呉れたのが面白くなかった。
「――よいか、こんどのそちの三坂の手柄は古今無双じゃ。これは決して忘れはおかぬ。忘れぬためにもあの地はそちが矛先で闘い開いた土地として、そちに遣わさねば済まぬのじゃ。わかるであろうな」
この「わかるであろうな」がそもそも臭い。決して古府中の城に入れた平岩親吉の方が汝にまさるというのではないぞ。よく合点して不足に思うなよ……そんな見え透いた殺し文句にひびいたのだ。
いや、そんな気がいまだにするのは、家康が浜松の城へ引きあげてゆくおりに、つつじが崎の館で云った、もう一つの冗談とも大きなかかわりがあるかも知れない。
その時家康は、戦勝者らしいゆとりを見せて、人質送り届けの報告をうけるとご酒を下された。
「――どうだ彦右衛門、そちも女房を亡くしてそろそろ一年、於福はよい女房であったと思うか、悪い女房であったと思うか。どうじゃ？」
相手の言葉には明らかに揶揄の調子が含まれてあったので、

「――よかろう筈はございますまい。於福は殿に押しつけられた、殿の従姉でござるゆえ」
元忠は、わざとむきつけに答えてやった。すると家康はちょっと顔いろを変えかけたが、思い直したように、
「――ハハ……彦右衛門めが、てれて居るわ。結構惚れくさって、尻に敷かれて居った癖に」
「――フン、この元忠ほどの者を尻に敷く……それ、それならばこそ、悪妻中の悪妻でございましょうが」
元忠は、相手の言葉尻を捕えてやり返して、しかし、そのあとで何ともやり切れない抵抗に出あった。
そのおり家康の太刀持ちとして席にあった元忠の嫡男新太郎が、その夜更けにまっ蒼な表情で父の寝所を訪れて来たのである。
「お父上お起き下され。母上は……母上は、夜前おっしゃったような、悪い女……悪妻中の悪妻、でござりましたか。まことの事をお聞かせ願わしゅう……」
新太郎忠政は、後に家康の供をして秀吉の前へ出たおり、鉄膝(かたひざ)の新太郎と綽名をつけられ、秀長の養子に所望されたほど、感情も行儀もみださぬ几帳面な気性なのだ。
元忠は頭をかかえてウロウロした。
「たわけめ！　ぶ、ぶ、武士がな、悪妻と申すはな、よい女房ということじゃわい。そうであろうが、まこと悪妻ならば、捨ておくものか。ブチ斬ってしまって居るわ」
それでも新太郎は、しばらく小首を傾(かし)げて考えていた。いったん心に湧いた疑惑は、そう簡単には消せないらしい。と云って、それ以上、父を追窮するのも無作法と思案したのであろう。依然まっ蒼な表情のまま、きちんと一礼して去っていった。

その新太郎も正月は暇をもらって浜松からこの城にやって来ている。いぜん何かこだわりを残した顔いろで、今日は二日……というのに、弟の久五郎をつれて羽根子の長生寺へ出かけていった。

長生寺は文明年間、鷹岳守俊和尚が金井村に創建したものを、小山田氏が永正年中現在の地に移して菩提寺とした曹洞禅の寺である。

その寺へ正月二日から出てゆく兄弟の脳裏に何があるかは元忠にも、わかり過ぎるほどによくわかっている。

（母を恋うているのだ……）

そう思うと、いよいよ元忠は気詰りになって来る。

（いったい、何であのような心にもないことを云ってしまったのか……？）

於福は決して容色のすぐれた女でも、才気の立優った女でもなかった。しかし、決して気に入らぬ女房でもなかった。黙々と子供を育て、良人のためにしんけんに馬を肥して来て呉れた女だ。

ただ世間では家康の口添えで、形原の松平家広の許から嫁いで来たので、元忠の方でもいくぶん煙たがっていたのでは……と、勘ぐっているだけにすぎない。

形原の松平家へは、家康の生母の於大の姉が水野家から嫁いで来ていた。したがって於福と家康は従姉弟にあたり、それが、家中でいくぶん元忠に重みをつける結果にはなっていたかも知れない……程度なのだ。

（それにしても、あの席で、殿はいったい何のつもりで死んだ女房の話などをしだしたのか……？）

新太郎と久五郎の二人に妙によそよそしい様子で寺へ出かけられると、冷たい孤独感が身をつつみ、心にもない放言が一層腹立たしく悔まれた。

「三方ケ原のおりの矢傷のあとがチクチク痛む。酒で温まろう。酒を持て」

浜松の城にある彦右衛門曲輪の居間とは比べものにならない書院の広さに首を縮めながら、小姓に酒を命じておいて、元忠はまた舌打した。

「この世に殿ほど、腹の立つお人はないぞ……」

その二

そう云えば、鳥居彦右衛門元忠は、近頃時々家康を憎んでいる自分に気付いてびっくりする。

いや、家康を憎む……というよりも、それは主従というがんじがらめの人間関係に、何とも腑におちかねるやり切れなさを覚え、それに反撥を感じているのかも知れない。

とにかく考えれば考えるほどわからなくなって来るのがこの主従の関係だった。元忠は決して家康に仕えようと思って、自分の意志で仕えていったのではない。彼が生れる前からこの関係は決っていた。

そう決めたのは父の伊賀守忠吉なのか、それともまたその父なのか？　とにかく、当時竹千代と云った家康の側へ行って仕えるのだ……父にそう云われたときは、彼が数え年十三歳のときであった。

その頃父の伊賀守は矢作川のそばの渡里（わたり）の小城に住んで、そんなにひどい貧乏暮しではなかった。岡崎城についている四、五万石ほどの領地から年貢を取立てて城に納めるのが父の役目で、父はちょいちょいその年貢の頭をハネていた。

そして、その米を秘かに銭に替えては土蔵の奥に積込んでゆく。それを元忠がいぶかると、

「――これはな、私曲を致して居るのではない。竹千代さま将来の御為めなのじゃ」

父はまぶしそうな顔で云った。

いま岡崎城に入っているのは今川義元の城代とその軍勢で、敵ではないが味方でもない。云わば占領軍なのだから少しばかり年貢を誤魔化してもよいのだということらしい。

「――もともとこれは竹千代さまの田からあがった竹千代さまのものなのだ」

そう云い聞かされて、いちばん上等の絹の小袖を着せられ、駿府の少将の宮町へ連れてゆかれて、その竹千代さまなるものに会わせられるまでは、実のところ元忠は、もっとおっとりした、黄金造りの太刀を佩いた上品な竹千代さまを想像していた。

ところが、行ってみておどろいた。家来の元忠……当時の鶴之助の方は絹の小袖を着ていったのに、主人の竹千代はゴツゴツの麻の布子を着て、洟汁を垂らした恐ろしく気の短い十歳の腕白小僧だった。だいいち、少将の宮町の彼の家というのが、渡里の忠吉の家の馬小屋ほどもない。そこで腕白小僧は、父の伊賀守が彼を竹千代に引合せると、

「――こ奴、絹を着ていくさる！」

羨望とも憎悪ともつかぬ顔で云った。その時父はすかさずそれに答えて、

「――竹千代さまも、早く絹をお召しになれるようにならねばなりませぬ」

先ず取りなしておいてから、鶴之助をこの爺の代りにお側へご奉公させておくゆえ、充分にお使い下さるようにという意味のことをくどくどと述べ立てた。

「――そうか。よし使うてやる。鶴之助、この百舌鳥を馴らせ。百舌鳥を馴らして鷹のように獲物をとらせるのだ」

縁側においてあった粗末な鳥籠をいきなり鶴之助の鼻先に突きつけた。

今ではそのおりの鶴之助の彼が、何と云ったか言葉の順序まではよく覚えていない。とにかく鷹とはもともと性根の違う百舌鳥など、どんなに馴らしてみたところで鷹になるものではない……と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com